

華開院けかいあん

〔西京ゆきき鞠負町にあり、浄土宗鎮西派浄花院に属す〕本尊阿弥陀仏あみだぶつ〔慈覚大師じかくの作、坐像一尺六寸五歩、真如堂本尊と同本なり、初は坂本念仏堂にあり〕

当院古へは天台宗にして、開基は亀山院かめやまのあんの皇子四品兵部卿守良親王もりよし五辻宮いつつじと号す。〔当院の縁起に後深草院の皇子と記すは謬伝ならんか〕出家し給ひて法達和尚はふたつおしやうとなりの、即安居院あぐゐ五辻宮を寺となし給ふ。其後弘安十年園城寺をんじやうじの浄華坊じやうけほう証賢しょうけん廿三歳の時、天台を出て浄土の易行に入、吉水よしみづの流を礼阿上人れいあに汲、向阿上人かうあと名を改め、鎮西四代の法孫はふそん当院の二世を嗣、又浄花院を開闢す。元亨げんかうの頃伊勢守貞経さだつねが、弟兵庫頭貞国ひやうごのかみさだくに、当院の本尊の示現を蒙り兄貞経が家督を相続し、当院の檀越となり、着する所の重器を納ける。〔初は五辻大宮にあり、今華開院町といふ。其後京極今出川の北にうつし、又寛永年中此地にうつす。○十夜の法会は慈覚大師帰朝の後はじめて行はれ、真如堂当院二箇に伝り、後世浄家の法式とはなりぬ〕

浄篤院じやうとくあん

〔下立売七本松の西、藍屋あゐやの辻子にあり。浄土宗浄花院に属す。開基は心誉上人、天正年中の建立なり〕本尊阿弥陀仏あみだぶつ〔慈覚じかくの作、長一尺八寸。伝云、源義経みなもとのよしつねの念持仏なりと。四十八願巡の第三番なり〕

西蓮寺さいれんじ

〔同街七本松の西にあり、浄土宗浄華院に属す〕本尊阿弥陀仏〔恵心ゑしんの作、開山は正誉上人、明暦三年の建

立なり〕

観音堂くわんおんだう〔寺内にあり。本尊十一面観音は菅神の御作、立像五尺許。伝云、金壳橘次きつじが念持仏なりとぞ。洛陽觀

音巡の第廿八番なり〕

出世稲荷社しゅつせいなりのやしろ

〔千本通丁立売の南三町にあり、此地初めは内藤氏公廨やくやしきなり。享保年中第を転ぜらるゝ時、地を神泉

苑町に買得して社を再建す、出世の号古く伝へて由縁詳ならず。近世靈驗昌やくやしきなりとてつねに詣人多し、此辺の公廨に

稲荷社所々にあり、繁によつてこゝに略す〕

梅雨井つゆゐ

〔下長者町和泉町の西北側人家田中氏の前裁にあり〕仲夏入梅の節、霖雨降続き梅雨晴んとする前七日許の

間、此井より清泉漲り出、井幹を越て流をなす、年によりて早して雨なきを俗に空梅雨といふ、其歳には水洋溢せず常

の如し。〔摂州丹生山田郷原野村里長栗花落氏せつしつにふやまだがうはらのむらりちやうつゆうちの後園にもあり、須磨明石名所図会に見へたり。此たぐひならんか〕

松林寺しょうりんじ

〔智恵光院通出水の南にあり、浄土宗黒谷に属す。本尊阿弥陀仏は聖徳太子しやうとくの作、立像三尺許。開基は清印

上人、天正年中の草創なり。当寺むかしより蘇命散そめいさんを出す、此藥方を日野家より寄附ありしとぞ。一説には清印上人の

慈母重病の時祈誓ありしに、本尊夢の中に此藥方を授給ふともいふ、婦人の病疾産前産後に効驗あり、世の人やすてらといふ、寺の名か藥の名かしらず」

稲荷荒神社

〔猪熊通出水の南にあり。三宝荒神の像は伝教大師の作、稲荷の神像は弘法大師の作、平安城開闢よ

りこゝに鎮坐あれば居成荒神と呼び、又稲荷明神同社あれば稲荷荒神とも称す、何れか是非をしらず。今天台宗の僧住して三宝寺と号し、山科毘沙門堂に属す〕

順興寺

〔丸太町通堀川の西にあり、西本願寺の院家なり。初は河州証提村にあり、寛永年中京都に遷す。開基は法

印大僧都実従上人、是は本願寺第八代蓮如上人の息廿七男なり、幼名を九九丸と号す、父蓮如上人八十一歳の時出誕あるの謂なり〕

本尊阿弥陀仏

〔春日の作、立像三尺五寸許、串後光なり〕

片破名号

〔天正年中織田信長と本願寺顕如上人と大坂石山合戦の時、当時二代顕従上人摂州楼岸の大將を蒙る。既に

軍乱れて危急なりし時、一士味方の中より現れ出顕従上人を助け、身代と成て討死す。不思議に思ひ鎧の袖に入れし蓮如上人の書給ふ六字の名号を見るに二つに切たり、片破は敵の手に残り、片破は味方にとゞまりて当寺の什宝とす〕